

THE NATIONAL
ART CENTER, TOKYO

NEWS

国立新美術館 ニュース

NO. 5

JAN.

2008



横山大観〈海に因む十題 波騒ぐ〉1940年(昭和15) 霊友会妙一記念館
Yokoyama Taikan, *Ten Sea Themes: High Waves*, 1940, Reiyukai Myoichi Memorial Hall

国立新美術館の開館1周年を迎えて

国立新美術館長 林田英樹

国立新美術館は、5番目の国立美術館として昨年1月に開館して以来1周年を迎えました。多彩な展覧会の開催、美術に関する情報・資料の収集・提供、教育普及活動の展開など幅広い事業に取り組んで参りましたが、展覧会への延べ入場者数が三百万人を上回るなど、実に多くの方々にご利用いただき、順調なスタートを切ることができました。これもひとえに皆様のご支援とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

全国的な活動を行っている美術団体などへの展覧会会場の提供につきましては、お申し込みが数多く寄せられました。本年度は合計69の団体にお使いいただくこととなりました。これらの団体には、原則として5年間は引き続きご利用いただけることとしております。お使いになった団体などからは、交通の便の良さ、バリアフリーの設計、新しく広い壁面、明るい照明などの面で使い易いなどの声を多くお聞きしております。入場者が前年までより増えたとの声も多く、新しい企画を始められた団体も目立ち、新聞の記事でも概ね良い評価をいただきました。一方で、初めての会場であったこともあり、課題もあると思われまので、団体の皆様の声に耳を傾けて、一層使い勝手の良い美術館となるよう努力して参ります。

自主企画展については、新しい美術の動向に焦点を当て、現代美術、建築やファッション、メディア・アートなど幅広い美術表現を取り上げることであり、開館記念展以来取り組んで参りました。今後とも、世界の美術の動向に目を配りながら、我が国の作家たちが活躍している分野にも力を注いで、皆様に新しい動きに親しんでいただきたいと考えております。

新聞社などとの共催展については、共催の各社や関係美術館、所蔵家の皆様などの特別なご協力により、コレクションを持たない美術館でありながら、話題の展覧会を次々に開催することができました。お陰で予想を大きく上回る皆様にご鑑賞いただきました。引き続き日本と海外の優れた作品をお楽しみいただけるように企画して参ります。

展覧会カタログを中心とした美術に関する情報や資料の収集・公開については、着実に充実を図ってきており、アートライブラリーは連日多くの方で賑わっております。また、

アートコモンズと称しているホームページを通じての国内の展覧会情報の提供も軌道に乗り、約1万2千件の情報を提供しています。ホームページへのアクセス数は年間1千万件にも上っており、多くの方のお役に立っているものと思います。JACプロジェクトとして行っている米国のフリーア美術館をはじめ米、独、豪の4研究機関への日本の展覧会カタログの提供については、昨年度約2千冊を送付し、大変好評をいただいております。日本の文化の発信に役立つことを願って、これらの事業は一層充実していきたいと考えております。関係情報・資料の提供などについて特に美術関係者の皆様の一層のご協力お願いいたします。

今後の美術館活動にとって、教育普及活動は極めて重要になっているとの考えから、その充実而努力しているところです。中でも、子どもたちを対象にした活動には特に力を注いでいきたいと考えております。公募団体の皆様と協力した教育普及活動も、当館の特色となるものと思います。

六本木アート・トライアングルと名付けた近隣美術館との協力関係も順調に発展してきましたが、さらに地域の方々との連携・協力を大切に参ります。

外国からは、美術館関係者のみならず様々な分野の指導的立場の方々にご訪問いただき、当館への関心の高さを感じました。同時に、各国で取り込まれている大規模な文化施設の充実についての情報に接することも多く、文化力の国際的な競争とも言える状況にあることも実感いたしました。我が国の中核的な文化施設としての責任を果たすためにも、今後積極的に国際的な連携を深めながら、活動の充実を図らなければならないと考えております。

多くの方々に愛されているこの美術館の建物を設計していただいた黒川紀章先生は、残念ながら逝去されましたが、末永く美しく維持するとともに、充実したレストランやカフェ、ミュージアムショップが大切であるとの設計意図に沿えるよう力を尽くします。

独立行政法人として、効率的な運営に努めるとともに、快適な環境の中で楽しみながら美術への理解を深め、生活を豊かなものにしていただく機会が提供できますよう、職員一同努力して参ります。

引き続き、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

開館1周年を機に

国立新美術館学芸課長 福永治

国立新美術館が1周年を迎えるにあたり、展覧会活動を中心にこれまでの活動を振り返ってみたい。

当館が独立行政法人国立美術館の5番目の館として開館したのは知られるとおりである。しかし他の国立美術館が、長い歴史の中で形成された所蔵作品をベースとして活動するのに対し、作品の収集を行わない当館が、美術館としての基盤を持たないことはあまり認識されていない。私は、このことが当館の特徴が見えにくいと言われる理由の一つだと思っている。さらに展覧会を始めとする事業は、他の4館との差別化が期待され、とりわけ在京の東京国立近代美術館、国立西洋美術館との棲み分けは大きな課題であった。それでも準備を重ねる中で、当館の英語表記となった「National Art Center」として、新しい美術動向を伝えるという役割が承認され、その構想のもとに開館へと至ったのである。当館が誕生するきっかけとなった「美術団体への会場提供」という役割を一つの軸とし、加えて学芸スタッフによる様々な展覧会や普及活動、さらには美術情報の集積や公開も含め、広く現在の美術状況を紹介するアート・センターを目指すことになったのである。

国立新美術館が21世紀の初頭に誕生し、美術センターとしての役割を果たすという前提に立てば、その始まりに、前世紀を回顧し、今につながる美術を検証する展覧会选择したのは自然であった。我々の立ち位置を確認する作業は、開館記念展「20世紀美術探検」にとどまらず、新聞社との共催展でも形を変えて行われた。官展の歴史をたどることによって日本の近代美術史を俯瞰した「日展100年」展、パリにおける20世紀の芸術動向を取り上げた「異邦人たちのパリ1900-2005」展、さらに「大回顧展 モネー印象派の巨匠、その遺産」においてモネに影響を受けた現代絵画を付け加えたのもその一貫である。

自主企画展の「スキン+ボーンズー1980年代以降の建築とファッション」でも、両分野の近年の成果を検証したが、同時にこの展覧会は、ファイン・アートのみならず、デザインの分野などにも取り組んでいく当館の姿勢を重ねたものであった。また、当館の美術資料のアーカイブ機能と展覧会を結びつけた「安齊重男の^{パーソナル フォト アーカイブス}「私・写・録」 1970-2006」展は、安齊氏が記録した3,000点の写真によって、40年に及ぶ

現代美術の有り様を確認出来る貴重な機会となった。

教育普及事業では、展覧会にあわせたレクチャー・講演会、ワークショップなどを行っているが、さらに国内外の様々な文化機関との交流によって、当館ならではのプログラムを加えている。初年度に開催した、クリスト&ジャンヌ=クロード夫妻の新しいプロジェクトに関するレクチャーや、「ドクメンタ12」のキュレーターを務めたルート・ノアック女史の講演会はその成果である。

さて開館2年目となる本年は、美術状況を概括することに力点を置いた活動から、個々の作家や特定の美術動向を取り上げていく方向に進みたいと考えている。その手始めに、この3月に開催する「アーティスト・ファイル」展をシリーズ化し、毎年定期的開催する予定を立てている。この展覧会は特にテーマを設けず、当館のスタッフが推薦する7、8名の作家の個展を集めるもので、美術の今を探る試みである。また8月には、活況を呈している中国の現代美術を紹介する「アヴァンギャルド・チャイナ」展、共催展ではアボリジニに出自を持つエミリー・ウングワレーの回顧展を開催する。共に西欧と違う美術の可能性を見てみたいと思う。これらを含め、当館が行う展覧会で注目いただきたいことに、会場構成とカタログがある。我々は開館以来、ホワイト・キューブの開放的な空間を生かし、美しく効果的な展示を心がけてきた。また、美術資料のアーカイブを目指す当館にとってカタログの充実は必須である。簡単なことではないが、これらについて、ゆくゆくは新美術館ならではのスタイルを作ってゆきたいと思っている。

美術館の活動は、よく長距離走に例えられる。実現までに長い時間と労力を要するからである。逆にいえば即効性の出にくい仕事であり、新しい取組みの成果が表れるのは数年後ということになる。まずは順調に滑り出した当館ではあるが、我々は未だ長い活動の一步を踏み出したに過ぎない。多くの方々の尽力によって開館した国立新美術館が当初の目的を達し、さらに将来にわたって充実した活動を継続できるよう、確かな舵取りをしなければならないと思うこの頃である。

横山大観の魅力

——作品の細部に迫る——

植田彩芳子

このたびの「没後50年 横山大観」展のサブタイトルは「新たなる伝説へ」である。没後半世紀を経て、横山大観の新たな魅力を紹介することを目的としている。

大観については、従来「心」とか「精神」とか「気韻生動」とかいった抽象的な言葉で語られることが多かった。また、「近代日本画壇の巨匠」というフレーズも大観の作品を見えにくくしている。そこで、ここでは横山大観作品の細部を見ることで、改めてその魅力に迫ってみたい。そうすることで、大観の新たな魅力——呑気・飄逸という魅力——を再発見することができるのではないだろうか。

呑気・飄逸という魅力

明治の文豪・夏目漱石は横山大観の《瀟湘八景》(図5参照、1912年、東京国立博物館、重要文化財)を見て、次のように言っている。

「一言でいふと、君の絵には気の利いた様な間の抜けた様な趣があつて、大変巧な手際を見せると同時に、変に無粋な無頓着な所も具へてゐる。君の絵に見る脱俗の気は高士禅僧のそれと違って、もつと平民的に呑気なものである。八景のうちのある雁は丸で揚羽の鶴の様に無恰好ではないか。さうして夫が平気でいくつでも蚊のやうに飛んでゐるではないか。さうして雲だか陸だか分からない上の方に無雑作に並んでゐるではないか。仰向いて夫を見てゐるものが、又如何にも屈託がなささうではないか。」¹

ここで漱石のいう「気の利いた様な間の抜けた様な趣」「平民的に呑気なもの」とほぼ同じ意味をもつ「飄逸」「脱俗」という要素は、明治末期以降における大観評価のキーワードであった²。しかし、この「飄逸」「脱俗」という特色は、大正期に限らず、大観作品に通底する魅力の一つとも言える。この漱石の言葉は、大観の魅力の本質を突いているのではないだろうか。

以下では、本展に出品された大観作品の細部を見ることで、大観の飄逸な魅力に迫ってみたい。

細部を見る

それでは、順に大観作品の細部を見ていこう。まずは、初期の大作《屈原》に描かれた鳥(図1)。屈原とは讒言によって左遷された憂国



図1 《屈原》部分、1898年、巖島神社(2月13日～3月3日展示)

の大詩人であり、この鳥は屈原を陥れた小人を暗示している。その鳥の目が三角眼になっている。白目に金泥を塗られたその眼差しは鋭いが、大真面目に描かれた絵の中で、この部分だけが漫画のように見えて、なんだかおかしいのだ。

次にボストン美術館からの里帰り作品《帰牧図》の牧童(図2)をご覧ください。巧み



図2 《帰牧図》部分、1904年頃、ボストン美術館

な臙膾体技法を駆使した作品だが、その中で脚の短い牛が坂道をのたのたと歩いていく(大観の描く牛はたいてい可愛い)。その背にしっかりとしがみついた子供。愛らしい姿が細部まで丹念に描き込まれている。

さらには、斬新な荒々しいタッチで描かれた



図3 《山路》部分、1911年、京都国立近代美術館

《山路》に登場する樵に注目してほしい(図3)。ぼんやりとした表情を浮かべた樵の後ろについて行く馬は、なんと陰悪な表情をしている。大観の絵がさらに面白くなるのは、この明治末期頃以降である。

1912年の《瀟湘八景》(東京国立博物館、重要文化財)は、細部までしっかり見てほしい作品だ。「瀟湘八景」とは中国江南の湿潤な風景をテーマとした伝統的な画題である。そのテーマを大観はかつてない表現で描き出している。特に魅力的なのは、「漁村返照」と「平沙落雁」だ。



図4 《瀟湘八景》のうち「漁村返照」部分、1912年、東京国立博物館、重要文化財(2月6日～18日展示)

まず「漁村返照」(図4)の画面手前の2羽の鵜。不恰好な姿でよちよちと歩いている。それに手を伸ばす子供は、母に連れられて買い物に行くのだろうか。水辺では、長いキセルを手にした老人を中心に談笑している。その後ろには、舟上で洗濯をする妻、釣りをしている子供、その奥の舟には肘をついておしゃべりをしている人たちが見える。おおらかな中国大陸江南の雰囲気伝わってくる。

「平沙落雁」(図5)は不思議な絵だ。水牛に乗って二人の子供が無邪気に遊んでいる。白衣の子供が見上げる視線の先には、雁が空を飛んでいる。その先では、雁の群れが休んでいる。まず、この空飛ぶ雁の形が面白い。まるで錨のような形だが、よく見ると、羽を広げた雁を真上から見た形なのだ。つまり、こ



図5 《瀟湘八景》のうち「平沙落雁」、1912年、東京国立博物館、重要文化財(2月20日～3月3日展示)

の絵は、画面の中で視点の位置が動くように構成されている。画面下部分では、絵を見る者は水牛を見下ろすように見ている。牧童の視線につられるままに雁を仰ぎ見たつもりが、実は空飛ぶ雁を真下に見下ろすことになっていて、そのまま雁が岸に休むシーンを俯瞰するのである。この複雑な視点の変化のため、画面上の砂州は「雲だか陸だか分らない」³ものになっている。



図6 《洛中洛外雨十題》のうち「宇治川雷雨」部分、1919年、株式会社 常陽銀行

京都周辺の雨の様子を様々に描き出した《洛中洛外雨十題》のうち「宇治川雷雨」では、

稲妻におびえる漁師たちに注目してほしい(図6)。宇治川に降り注ぐ激しい雷雨をテーマにしたこの作品では、絵の片隅で、蓑に笠をかぶった漁師たちが荒れ狂う風雨の中、懸命に身を隠しているのである。なんとも微笑ましい。

細部を堪能できるのは、なんといっても大絵巻《生々流転》であろう。冒頭から順に細部を見ていってほしいが、ここでは特に、樵の家の様子を紹介しよう(図7)。樵の家では、



図7 《生々流転》部分、1923年、東京国立近代美術館、重要文化財

馬が水を飲み、庭では鶏を飼って生活している。そして、家の中からは、妻が顔を出して夫の帰りを待っている。そのどこか不恰好な描写が可愛らしく、また呑気な趣を感じさせる。

また、《龍蛟躍四溟》は改組第1回帝展に大観が出品した渾身の力作であるが、ここに描かれた3匹の龍がなんとも可愛いらしい。前脚をかつと広げ、目を見開き、叫び声をあげる一匹の龍。左隻からその龍をのぞき見る龍は、何だろうと言うように目玉をくりくりとさせ、様子をうかがう。右隻の岩上の龍(蛟か)は、2匹の様子を落ち着きばらって眺めている(図8)。3匹の龍の対話が聞こえてきそう



図8 《龍蛟躍四溟》部分、1936年、宮内庁三の丸尚蔵館(2月13日～3月3日展示)

なこの表現は、龍の顔、特に目の秀逸な描写によるものであろう。卵形の目には、白目に

金泥を施すことで、くりっとした立体感を与えている。黒目には濃淡二色の墨を用いることで、表情を持たせている。そのため、迫力のある画面にも、どこか飄々とした魅力がある。

最後に《或る日の太平洋》を見てみよう。大観による戦後の代表作であり、「富嶽登龍図」という古来から描かれてきた主題の作品である。大観の作品では、逆巻く大波の陰に、まるでトカゲのように小さな龍が顔をのぞかせている(図9)。よく見れば、卵形に目玉の飛び



図9 《或る日の太平洋》部分、1952年、東京国立近代美術館

出した龍であり、波越しに富士山を眺めている。この龍も大観らしい飄々とした顔をしている。

「何が描かれているか」、「どのように描かれているか」、この2点に気をつけてみると、絵を見る楽しみは広がる。大観の作品も、「近代日本画の巨匠」の作品などと気負わずに、画面に何が描かれているか、ちょっとよく見て、新たな魅力を見つけてほしい。

(う えだ さよこ 前国立新美術館研究補佐員/現東京国立博物館特別展室研究員)

1 夏目漱石「文展と芸術」『東京朝日新聞』1912年10月15日～28日。

2 このことは、本展図録に掲載した拙稿「戦前における横山大観評価の形成史」で述べたので、ご一読いただければ幸いです。

3 前掲註1。

昨年12月、ニューヨークのニューミュージアム¹がリニューアル・オープンした。金沢21世紀美術館の設計で知られるSANA A(妹島和世+西島立衛)のデザインにより生まれ変わった美術館は、敷地面積は以前の2倍、シアターや教育センター等の施設も備える。積み木を重ねたようなユニークな建物が、現代美術の発信地として新たな注目を集めている。

ニューミュージアムは今から30年前の1977年、最新の美術を紹介する施設として設立された。創設者のマルシア・タッカーはもともとホイットニー美術館のキュレーターだったが、企画したりチャード・タトル展があまりの斬新さから物議をかもし、それが原因でホイットニーを解雇された。タッカーが、従来の美術館とオルタナティブ・スペース²の中間的な存在をめざして新たに美術館を立ち上げたのは、その翌日のことである。ソーホー地区の南に構えた小さな事務所で、当初はオフサイトの展覧会を企画していた美術館は、移転や改築を繰り返しながら徐々に拡大し、その間、リチャード・プリンスやジェフ・クーンズら当時まだそれほど知られていなかった新進作家を次々と紹介していった。ニューミュージアムの30年はまさに、伝統に縛られない若く挑戦的な美術館の歴史であったと言える。

ニューミュージアムは、今では高級ブティック街として知られるソーホーを離れ、最近までマンハッタンでも最も寂れた地域の一つだったロウアー・イースト・サイドに新たに美術館を開館した。この移転に関しては、ミッドタウンや高級アパート街に建つメトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館(MoMA)などの大型美術館とは対照的に、権威や伝統から常に自由な組織に相応しいと肯定的な意見も多い。

しかし、今回のリニューアルは楽観的な面ばかりではない。新しい建物建設のために、美術館は5500万ドルとも言われる資金調達を行った。リニューアルにともない予算やスタッフ、サービスも拡大し徐々に大きな組織へと変わっていく美術館が、果たして従来どおり革新的であり続けられるのか、と危惧する声も聞かれる。また、ニューミュージアムは

当初、所蔵品を持たなかったが、寄贈により今では千点ほどの作品を所蔵する。現館長のリサ・フィリップスは今後もコレクションを増やしたいとしており、もしそうなれば近い将来、さらに広いスペースが必要になるだろう。

ここ10年、ニューヨークでは美術館の大規模な改築や分館のオープンが相次いでいる³。2004年のMoMAのリニューアルは記憶に新しい。ディア芸術財団は2003年、ニューヨーク郊外にディア・ビーコンを開館した。製紙工場を改築した巨大な空間にリチャード・セラやマイケル・ハイザーらのサイト・スペシフィックな作品を常設展示し大きな話題を呼んだ。さらにグッゲンハイム美術館は海外へ進出し、1997年にスペインのビルバオに分館を開館した。フランク・ゲーリーの設計による同館は開館5年で530万人の来館者を集め、その経済効果は2001年までで9億2500万ドルとも言われている⁴。

コレクションを持つ美術館にとって、年々増え続ける作品を収蔵、展示するためのスペースの確保は深刻な問題である。しかし、美術館の拡大は物理的なスペースの問題に留まらない。建物の建設や改築には膨大な費用がかかるため、戦略的かつ大規模な資金調達が必要になる。建物が大きくなれば当然、維持費や運営費も拡大する。財政的な基盤を整えるために来館者の増加が求められ、そのための大型企画展の開催、来館者サービスやプログラムの充実さらに予算が必要になる。例えば、MoMAはリニューアルに際して8億ドルとも言われる資金調達キャンペーンを行った。運営費の増加を見込み、うち1億2千万ドルは基金設立のための資金として、さらに1億ドルは将来の土地購入を見越して集められた。それでも新しい美術館の運営には膨大な経費がかかるため、入館料は12ドルから一気に20ドルに跳ね上がった。組織の拡大は、時に美術館のミッションにも影響を与える。2000年のMoMAとP.S.1⁵の提携は、「近代」美術館であるMoMAの「現代」美術への積極的な関与を実現したが、一方、P.S.1のように常に柔軟な体制の中で最新かつ実験的なアートを紹介してきた施設にとって、組織の拡大は自らの存在意義を揺るがしかねない。



新しいニューミュージアム Photo by Dean Kaufman

時に目的と手段が逆転しながら拡大する美術館は、まるで成長し続ける企業のようなのだ。その背景には、展示・収蔵スペースの確保のみならず、映画などの娯楽産業との熾烈な競争や、美術作品の価格が高騰する中での施設維持費や人件費、保険などのコストの上昇を前に、美術館が生き残りをかけて拡大を図るといった厳しい状況がある。しかし、もともと利益を生むことを目的としない非営利組織として存在するアメリカの美術館は、利益よりも公益を優先した教育施設としてのミッションを重視し、それ故に様々な税の優遇を受けてきた。あまりに商業的な戦略が非営利組織として適正であるのか、との議論が起こるのはそのためである。

社会の変化やアートを取り巻く環境に応じてダイナミックに変化を遂げていく姿には、アメリカの美術館の逞しさを見るようだ。しかしその裏には、美術館が抱える様々な問題が潜んでいる。1929年にわずか9点のコレクションから始まったMoMAも、大小8回の改築を経て今や世界を代表する大美術館となった。今回のリニューアルによってニューミュージアムはどう変わるのか、あるいは変わらずにあり続けるのだろうか。

西野華子(にしの はなこ 研究員)

1 New Museum of Contemporary Art

2 新進作家の実験的なアートを紹介する展示スペースで、廃校となった学校や倉庫等を再利用することが多い。アメリカでは非営利組織として位置づけられている。

3 ロンドンのテート・モダン、パリのルーヴル美術館やボンビドー・センターに見られるように、美術館の拡大は世界的な傾向でもある。

4 Kim Bradley, "Regional Renaissance: eight years after the opening of the Guggenheim Museum Bilbao, the art scene in the Basque Country is thriving," *Art in America*, November, 2005.

5 1971年にクイーンズ地区の廃校になった公立小学校を改築して設立された、オルタナティブ・スペースの先駆。

別館1階に「特別資料閲覧コーナー」を開設しました

国立新美術館は、戦後日本で開催された展覧会カタログを中心に、美術に関するさまざまな資料を収集しています。現在その大半を3階のアートライブラリーで公開し、多くの方々にご利用いただいておりますが、歴史的な資料や、専門的な資料、状態が悪く不特定多数の利用に耐えられない資料などについては公開を差し控え、別館で保管してきました。このたび、別館1階に「特別資料閲覧コーナー」を設け、そのような資料についても、予約制で公開する体制が整いました。皆様のご利用をお待ちしています。

Q 「特別資料閲覧コーナー」では、どのような資料が公開されますか？

A 以下の資料です。

- ・1969年以前に国内で発行された展覧会カタログ
- ・1969年以前に国内で発行された画廊のカタログ
- ・国内の美術館や博物館の年報、紀要
- ・痛みがひどく取り扱いに注意を要する資料

Q どのような人が利用できますか？

A 閲覧したい資料と閲覧の目的があらかじめ明らかである方なら、どなたでもご利用いただけます。

Q 別館でしか閲覧できない資料かどうかは、どのようにすればわかりますか？

A アートライブラリーに設置している蔵書検索用の端末か、国立新美術館ホームページ内にある蔵書検索で、検索結果の所在欄に「国新美別館」と記載されている資料が、特別資料閲覧の対象となる資料です。

Q いつ、どうすれば利用できますか？

A 別館1階の「特別資料閲覧コーナー」は、毎週木曜日、金曜日の13:00～17:00に開室します。（なお、木曜日、金曜日が祝日または休日にあたる場合は休室します。）ただし、ご利用は予約制です。ご利用希望日の5日前までに、アートライブラ

リーのカウンターか国立新美術館ホームページ内の資料閲覧予約システムでお手続きください。（閲覧コーナーの定員を超えた場合は、ご希望の日時に予約をお受けできないことがありますので、ご了承ください。）

Q 資料の複写はできますか？

A できますが、資料の劣化を防ぐため、ご希望の箇所を、資料の取り扱いに慣れた担当職員が複写する方法になります。資料の状態によっては複写できないことがありますので、ご了承ください。なお、複写料金や複写に関する注意事項は、本館3階アートライブラリーと同様です。

詳しくは、本館3階のアートライブラリーで配付している『特別資料閲覧コーナー利用案内』、もしくは国立新美術館ホームページ内の「特別資料閲覧コーナー利用案内」をご覧ください。



特別資料閲覧コーナーは、別館1階展示コーナーの隣にあります



閲覧時に必要な辞典、辞書等の参考図書や、当館の蔵書が検索できるコンピュータ端末も配備しています

教育普及イベント レポート

TA:鳥居茜(とりにいあかね 研究補佐員)/YN:吉澤菜摘(よしざわなつみ 研究補佐員)

安齊重男の「私・写・録」1970-2006展 関連企画 大学生とのワークショップ 「アートまわりのおしゃべり —感じたこと、聞きたいこと」

講師：安齊重男(アート・ドキュメンタリスト)

ワークショップ1：2007年9月23日(日) 14:00-16:30

ワークショップ2：2007年9月30日(日) 14:00-16:30

国立新美術館 別館3階多目的ルーム

「現代美術の写真を撮り始めたのは30歳を過ぎてからだったけど、それ以前にやっていたことも全部今に役立っている。絶対に無駄にはなっていない。」安齊さんの一言一句を聞き漏らすまいと、身を乗り出す学生たち。

異例ともいえる対話形式のワークショップは、「直接語り合うことを通じて、学生たちにこれからの自分を考えるきっかけをつ



安齊重男氏



かんでほしい」という安齊さんの思いから企画されました。展覧会の話、安齊さんの経験談やアーティストとのエピソード、さらには学生の進路相談まで、対話の内容は多岐に渡り、熱気に満ちた「おしゃべり」が展開されました。全2回、計51人の学生が参加し、様々な分野で学ぶ学生同士の意見交流の機会ともなりました。(YN)

講演会

クリスト・アンド・ジャンヌ=クロード 現在進行中の2つのプロジェクト

“オーバー・ザ・リバー、コロラド州、アーカンサス川のプロジェクト”と“ザ・マスタバ、アラブ首長国連邦のプロジェクト”

講師：クリスト・アンド・ジャンヌ=クロード(美術家)

2007年11月8日(木) 15:00-17:00

国立新美術館 3階講堂

協力：財団法人 三宅一生デザイン文化財団

通訳：柳正彦(アートライター)



クリスト、ジャンヌ=クロード両氏

布などを用いて景観を一時的に変貌させる、大規模かつ国際的なプロジェクトを手がけ、日本でも多くのファンを持つ現代美術家クリスト・アンド・ジャンヌ=クロード。265人の聴衆を集めた講演会では、半世紀にわたる彼らの創作活動、そして現在取り組んでいる最新のプロジェクトの全容が語られました。(YN)

アーティスト・ワークショップ

わたしの家、わたしの服 ～着られるお家をつくろう～

講師：山縣良和(ファッションデザイナー)

mafuyu(ニットアーティスト)

2007年12月1日(土) 10:30-16:30

国立新美術館 別館3階多目的ルーム他

国立新美術館地下1階のSFTギャラリーで、「My Town in My Home」という家のかたちをしたニット作品を展示している山縣良和氏とmafuyu氏を講師に迎え、ファッションをテーマにしたワークショップを開催しました。小学校3～6年生を中心に23名が参加。SFTギャラリーで作品を見学した後、山縣さんからファッションデザイナーの仕事についてお話をいただきました。参加者は、ダンボールをベースに、絵の具や色紙、持参した古着やおもちゃなどを用いて、それぞれが理想とする家のかたちをした服を制作。最後に行われたファッションショーでは、美術館1階エントランスの特設ステージで、子どもたちが自らモデルになって作品を身につけ、たくさんのお客様の前で披露しました。(TA)



左が山縣良和氏、右がmafuyu氏

